

○98句目の「莊叟」について

『菅家後集』「504官舎幽趣」に「此時傲吏思莊叟、隨所空王事尺迦」の句が見える。

▼「此時傲吏思莊叟」について

この句中の「傲吏思莊叟」には、川口久雄氏を始めとして、既に先学にも指摘があるように『史記』「老子・韓非列伝第三」中につきのような一文を踏まえる。

莊子者、蒙人也。名周。周嘗爲蒙漆園吏。(中略)。楚威王聞莊周賢、使使厚幣迎之、許以爲相。莊周笑謂楚使者曰。千金重利、卿相尊位也。子獨不見郊祭之犧牛乎。養食之數歲、衣以文繡、以入大廟。當是之時雖欲爲弧豚、豈可得乎。子亟去。無汚我。我寧游戲汚瀆之中、自快、無爲有國者所羈、終身不仕以快吾志焉。

(口語訳) 莊子というのは、蒙の人である。名は周。かつて蒙で漆園うるしばたけ管理の役人であった。梁の恵王や斉の宣王と同じころである。(中略) 楚の威王は莊周を賢者だと聞き、使者を立て手厚い贈り物を与えて迎え、宰相になると約束した。莊周は楚の使者に向かい笑いながら言った。「千金の利益は重く、卿けい・相しやうは尊い位だが、おぬしは郊の祭りに生贄いけにえにされる牛を見たことはいないか。何年も飼育して、繡ぬいとりの着物を着せて、大廟へ引き込む。その時になって小さな豚になりたいと思っても、それができようか。おぬしはすみやかに去れ。